

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.181

April 2013

オバマ外交の 4 年間

佐々木卓也

オバマ外交は 4 年前、国内では危機的な経済・金融状況、国外では二つの戦争を抱えながら、内外の大きな一おそらくは過大な一期待を担って船出した。懸案の中東和平交渉は停滞し、気候変動問題でもとくに進展はなく、オバマが大統領就任直後に閉鎖を指示したはずのグアンタナモ収容所はそのままである。またビンラディンを殺害し、無人爆撃機を使ったパキスタン領土内のテロ組織への攻撃を拡大しているが、国際テロの脅威はむしろ拡散している。だが同時に幾つかの重要な成果をあげたことは確かである。ここでは限られた紙幅ながら、オバマ外交の 4 年間をその成果と特質を中心に概観したい。

まず、ブッシュ前政権下ですっかり下落したアメリカの国際的イメージを大幅に改善した。アメリカは中東諸国では依然不人気であるが、その他の多くの国々、地域では好感度の回復に成功した。この点ではオバマはもちろん、クリントン前国務長官の役割には大きなものがあった。

次に、オバマ政権は 2011 年末までにイラクからの全部隊の撤収を終え、アフガニスタンに対しては一時増派したものの、2011 年夏に撤兵を開始した。アメリカは 1 兆 4000 億ドルを超える戦費、米人将兵の死者だけで 6500 名を数える二つの戦争の終結を射程に置き、ようやくイラク・アフガン後の外交を展開する環境を整えつつある。その焦点になっているのがアジア・太平洋地域、とりわけ中国である。ブッシュ前政権は米中戦略経済対話を創設したが、オバマ政権はこれを経済のみならず、外交・安全保障を含めた長官級の協議の場に広げ、さらに 2011 年秋以降は明確にアジア・太平洋重視の安保方針を打ち出した。これが第三のポイントである。

四つ目のポイントとして、膨大な財政赤字が国家安全保障の重大な脅威であるという認識がある。アメリカ政府では 1960 年代以降軍需ケインズ主義が浸透し、一般化した。健全な経済が国家安全保障の要諦であるという言説は久しぶりのことである。オバマは 2012 年 1 月に新たな国防戦略を発表した際、経済と軍事の間に適切な均衡を求めたアイゼンハワー大統領の警告を引用しな

から新方針を説明した。この認識は、「財政の壁」を前にした国防予算の強制削減の可能性によって一層強められている。

五つ目に、オバマ外交に関して非常に印象的なことは、オバマは理念的な修辞を用いて雄弁に政策を語りながら、いまだにいわゆる外交ドクトリンを打ち出していないことである。これをアメリカ外交のある種の成熟と見るのか、確たる方針の欠落と見るのか、見解は分かれるが、少なくともアメリカの力の相対的な低下、外交問題の多様化・複雑化に対して、短絡的な処方箋を拒否し、自国の価値観さえも相対化するかに見えるオバマの個人的信条が関係しているようである。2011 年春のリビア内戦の際、政府高官がアメリカは「後方から指導する」と述べ、軍事介入の主導を西欧諸国に委ねたことで、この発言は保守派の格好の攻撃材料となったが、存外オバマ外交の基本特性を表現しているかもしれない。

最後に、おそらく最も判断が難しいのが、オバマが提唱した「核兵器のない世界」の実現に向けた成果である。彼のノーベル平和賞受賞には、核軍縮・不拡散の分野での国際社会の期待があった。オバマ政権はロシアと大幅な核軍縮で合意し、二度の核保安サミットを開催し、「国家安全保障戦略」文書（2010 年 5 月）は「核兵器のない世界」の追求を確認した。さらにルース米大使が広島と長崎の平和記念式典に米政府代表として初めて出席したことは、率直に評価すべきであろう。しかしその一方で、この問題の大きな焦点である北朝鮮とイランは共に核開発を着々と進めており、オバマ政権の経済制裁を中核とする対抗措置は明らかに限界を露呈している。

オバマは二回目の大統領就任演説でともにリベラル色の強い政策構想を示したが、慎重なプラグマティズムとも形容すべき外交の基調に大きな変化はないであろう。彼が次期の国務長官と国防長官にケリー上院議員とヘーゲル元上院議員をそれぞれ指名し、上院で承認を得た人事は、それを裏付けていると思われる。

（立教大学）

『アメリカ研究』第48号「特集論文」募集のお知らせ

お知らせした通り、『アメリカ研究』第48号の特集テーマは「選挙とアメリカ社会」と決まりました。

2012年は、米・露・仏・韓で大統領選が立て続いたのに加えて、日本でも衆議院の解散総選挙が行われ、まさに「選挙年」であった。世界のリーダーが入れ替わる中で、アメリカではバラク・オバマの再選が決まった。しかし、オバマ・フィーバーに沸いた4年前に比べると、2期目としては類を見ないほど多くの国民が集ったものの、景気低迷から脱却できない中で、オバマ大統領に対する国民の目は冷ややかなものになった感否めない。一方で、再選を意識しなくてよいオバマ大統領が就任演説の中で触れた銃規制の問題や同性愛者の人権問題など、アメリカ社会における困難な問題にどこまで踏み込んで取り組むことができるのか、期待する声も大きい。

また、2013年はリンカーン大統領の奴隷解放宣言から150周年にあたる。そして、1月20日が公民権運動を率いたマーチン・ルーサー・キング牧師の功績をたたえる祝日であることから、オバマ大統領は就任式の宣誓の場で、アメリカ社会における人種差別問題に取り組んだ二人の故人が使った聖書の上に手を置いて、宣誓を行った。さらに就任式の国歌斉唱は黒人歌手のビヨンセが行ったように、今回の就任式は、アメリカ社会における人種差別問題や公民権運動の歴史を感じさせる要素が散りばめられていたように思われる。

そこで、特集論文では、オバマ再選を一つのきっかけとしながらも、種々の選挙を振り返り、政治、歴史、メディア、映像、文学など幅広いアプローチから「選挙とアメリカ社会」について問い直してみたい。たとえば、独立期から現代の選挙運動におけるメディアの変容や、奴隷制から今日のマイノリティの人権問題までつながるような社会問題、あるいは「選挙」を通じて映し出される諸外国とアメリカの関係など、が考えられる。19世紀から今日までのアメリカ社会の変容を選挙というフェーズを切り口に、様々な角度から描き出し検討するべく、意欲的な論文の投稿に期待したい。

「特集」に執筆希望の会員は、2013年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メール（office@jaas.gr.jp）でお願いします。執筆要項は、学会ウェブサイト（http://jaas.gr.jp）を参照のこと。2013年9月3日（火）学会事務局に必着のこと。

2013年アメリカ大使館賞の募集

—日本で学ぶ大学院生対象の旅費援助奨学金—

アメリカ合衆国大使館からの基金提供による旅費援助奨学金を以下の条件を満たす大学院生一名に給付し、ワシントンD.C.で開催されるASA (American Studies Association) の年次大会に派遣します。

期間：2013年11月21日-11月24日

場所：ワシントンD.C., ヒルトンワシントンD.C.

ASA ホームページ参照：http://www.theasa.net/annual_meeting/

奨学金の金額：1,500ドル

応募資格：

1. アメリカ学会の会員であること。
2. 日本の大学の大学院博士課程に在籍し、専任職に就いていないこと。
3. ASA 大会の開催時に日本からの旅費を要すること。
4. 日本国籍あるいは日本永住権を有すること。
5. 渡米時に45歳未満であること。

審査結果：2013年8月15日頃に、学会HP上で公表する予定です。

応募を希望される方は、以下の書類を2013年7月1日から2013年7月21日までの期間に、アメリカ学会事務局 office@jaas.gr.jp に e-mail で送ってください。なお、事務局での混乱を避けるため、応募メールの件名は「ASA 大使館賞応募 (2013)」と必ず明記してください。

1. 履歴書
2. 出版業績リスト（ある方のみ）。
3. 過去の ASA と OAH 年次大会への参加記録（ある方のみ）。それぞれについて参加年、大使館賞受賞経験の有無、口頭発表経験の有無を明記すること。
4. アメリカ大使館が別に助成している日米協会の「米国研究助成プログラム」奨学金の受給記録（ある方のみ）。
5. アメリカ研究へのあなたの関心と博士論文のための研究計画（英語で500-600語）。
6. 今回の ASA 年次大会で口頭発表を予定している方は、そのペーパーのタイトルと簡略な要旨。

国際委員会

会員の皆さまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局<office@jaas.gr.jp>までお知らせ下さい。

また、メールアドレスをご登録されていない方は、極力ご登録下さいますようお願いいたします。

事務局

アメリカ学会第47回年次大会プログラム

1. 月 日 2013年6月1日(土) 6月2日(日)
2. 場 所 東京外国語大学
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
会場校連絡先 金井光太郎(電話: 0422-36-7175 E-mail: kanai@tufs.ac.jp)
佐々木孝弘(電話: 045-717-5005 E-mail: taksas@tufs.ac.jp)
3. 受 付 6月1日(土)・2日(日) 研究講義棟1階ガレリア中央部
4. プログラム (詳細は大会当日に受付で配布する「大会要項」に明記します。)

第1日 6月1日(土曜日)

自由論題A 〈占領期日本とアメリカ〉 [研究講義棟1階107教室] (9:30~11:30)

司会 高原秀介(京都産業大学) コメント 松田武(京都外国語大学)

佐藤晶子(大阪大学・院)

「占領期の公衆衛生: デミングのSQC戦略と結核死亡率半減」

鈴木紀子(大妻女子大学)

「冷戦期の『文学大使』たち——戦後日米のナショナル・アイデンティティ形成における米文学の機能と文化的受容」

自由論題B 〈政治の言説と空間〉 [研究講義棟1階108教室] (9:30~11:30)

司会 和泉真澄(同志社大学) コメント 森本あんり(国際基督教大学)

島晃一(早稲田大学・院)

「預言者的言説と境界線——黒人神学の批判的検討」

石神圭子(北海道大学)

「アメリカにおけるコミュニティの組織化運動と新たな政治空間の模索——ソール・アリンスキーの哲学と実践を中心に」

自由論題C 〈政策と経済理念〉 [研究講義棟1階113教室] (9:30~11:30)

司会 中嶋 醸(千葉商科大学) コメント 岡山裕(慶応義塾大学)

向井洋子(琉球大学・講)

「アメリカにおける福祉国家再編の起源——ニクソン政権の福祉改革を中心に」

春田素夫

「連邦準備法のオーサiership」

榊原胖夫(同志社大学・名)

「文化の多様性と経済の発展」

自由論題D 〈文化と行為〉 [研究講義棟1階114教室] (9:30~11:30)

司会 高野泰志(九州大学) コメント 遠藤泰生(東京大学)

野村奈央(東京大学・院)

“Amish Consumer Culture: Strengthening Community Bonds through Shopping”

大塩真夕美(白百合女子大学・講)

「19世紀後期ニューヨーク富裕層家庭における『使用人』についての一考察」

水島新太郎(近畿大学・講)

「『性的』『非性的』の狭間で葛藤する男同士の絆——1950年代ビート・ムーブメントのbromance (brother-romance)を中心に」

昼食休憩 (11:30~12:45)

理事・評議員会 (11:35~12:35) [研究講義棟2階226教室]

清水博賞 受賞式 (12:45~12:55) [プロメテウスホール]

シンポジウム1 人種と政治の交差点——1960年代以降のアメリカ (13:00~15:30) [プロメテウスホール]

(America at the Crossroads of Race and Politics: The 1960s to the Present)

司会・コメント: 松本悠子(中央大学)

Matthew Frye Jacobson (ASA President, Yale University) “From Nixon’s Southern Strategy to Obama’s Victory: Debating the ‘Post’ of ‘Post-Civil Rights’”

David Farber (Temple University) “Black Power: Working the Interstices of Radical Activism and Insider Politics”

竹沢泰子(京都大学) “Post-identity Politics and Beyond: Narratives and Works by Multiracial Japanese American Artists”

シンポジウム2 平等概念の多様性 (15:40~18:10) [プロメテウスホール]

司会 古矢 旬(アメリカ学会会長, 北海商科大学)

中野耕太郎（大阪大学）	「革新主義と社会的な平等」
樋口映美（専修大学）	「アメリカ史におけるカラーブラインドと公民権」
待鳥聡史（京都大学）	「アメリカ政治における異端的理念としての平等」

懇親会（18：30～20：30）[大学生協食堂ミール]

第2日 6月2日（日）

部会A 「連続企画 アメリカの教え方（教科書を作る）」[研究講義棟1階115教室]（9：30～12：00）

司会・報告	貴堂嘉之（一橋大学）	「私の高校世界史教科書づくりと大学での歴史教育」
報告者	鳥越泰彦（麻布高等学校）	「世界史教育のなかのアメリカ史」
	渡辺靖（慶應義塾大学）	「入門テキスト『現代アメリカ』（有斐閣）の製作と刊行を振り返って」
	杉野健太郎（信州大学）	「初学者のためのアメリカ研究教育」

部会B 「核とアメリカ① 核/原子力言説と我々の現在」[研究講義棟1階108教室]（9：30～12：00）

司会	新田啓子（立教大学）
報告者	山口菜穂子（明治大学・講）「誰が原子力災害を語るのか——福島の一とびとを犠牲者にしないために」
	北野圭介（立命館大学）「核の翻訳」
	吉見俊哉（東京大学）「夢の原子力——平和利用博覧会と大衆文化表象を中心に」

Workshop A [研究講義棟1階107教室]（9：30～12：00）

Chair: Satoshi Nakano (JAAS, Hitotsubashi University)

Panelists: Moon-Ho Jung (ASA, University of Washington) “Revolutionary Currents: Race, Insurgency, and Empire Across Pacific”

Eiichiro Azuma (JAAS, University of Pennsylvania) “Japanese Immigrant Settler Colonialism in the U.S.-Mexican Borderlands and the U.S. Racial-Imperialist Politics of the Hemispheric ‘Yellow Peril’.”

Judy Tzu-Chun Wu (OAH, Ohio State University)

Commentators: Matthew Frye Jacobson (ASA President, Yale University)

Satoshi Nakano (JAAS, Hitotsubashi University)

昼食休憩（12：00～13：30）

分科会（12：10～13：25）（内容は、以下を参照）[研究講義棟2階207, 209, 211, 212, 213, 214, 223, 224, 225教室]

総会（13：30～14：00）[研究講義棟2階226教室]

部会C 「移民問題の現在」[研究講義棟1階115教室]（14：10～16：40）

司会	久保文明（東京大学）
報告者	松岡泰（熊本県立大学）「移民問題の諸相——移民送り出し国の移民対策を中心に」
	西山隆行（甲南大学）「移民政策と国境問題——麻薬、不法移民とテロ対策」
	賀川真理（阪南大学）「カリフォルニア州における高等教育と移民——ドリーム・アクトを中心に」
討論者	庄司啓一（城西大学）
	村田勝幸（北海道大学）

部会D 「核とアメリカ② 原子力平和利用と冷戦外交」[研究講義棟1階108教室]（14：10～16：40）

司会	李鍾元（早稲田大学）
報告者	中沢志保（文化学園大学）「マンハッタン計画下の原子科学者と原子力平和利用提言——『ジェフリーズ報告』を中心に」
	土屋由香（愛媛大学）「アイゼンハワー政権期におけるアメリカ民間企業の原子力発電事業への参入と冷戦」
	田中利幸（広島市立大学広島平和研究所）「なぜ原爆被害国が原子力大国になったのか？——原子力平和利用と広島」
討論者	倉科一希（広島市立大学）

部会 E 「ポピュラーカルチャーと北米先住民」〔研究講義棟 1 階 114 教室〕（14：10～16：40）

司会・報告	長 岡 真 吾（島根大学）	「ポピュラーカルチャーと文化共有——シャーマン・アレクシーにおける文化的同化」
報告者	余 田 真 也（和光大学）	「ステレオタイプからオルタナティブへ——映画における北米先住民像の変容」
	鎌 田 遵（亜細亜大学）	「ファッション・エンターテインメント産業におけるアメリカ先住民の表象」
	喜 納 育 江（琉球大学）	『『先住民性』の商品化と文化的正統性——ツーリズムとプエブロ先住民のアート」

Workshop B 〔研究講義棟 1 階 107 教室〕（14：10～16：40）

Chair:	Noriko Ishii (JAAS, Sophia University)	
Panelists:	Anita Mannur (ASA, Miami University)	“Writing the Waves of Tsunami: Kinship Networks in South Asian Transnational Writing”
	Jungman Park (ASAK, Hankuk University of Foreign Studies)	“Once Upon a Time in the Corn Field: Anti-Chinese Sentiment of the 1870s and Literary Reflections”
	Yayoi Haraguchi (JAAS, Ibaraki University)	“Building Resilience in Post Disaster Communities”
Commentators:	Dong Ho Sohn (ASAK President, Hankuk University of Foreign Studies)	
	Bryant Simon (OAH, Temple University)	

5. 1) 懇親会は事前の申し込みが必要です。懇親会費 6,000 円は同封の払い込み用紙にて 5 月 7 日（火）までにご納入ください（期日厳守）。払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返しできませんので、ご注意ください。
2) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
3) 非会員の大会参加費は、1,000 円です。会場受付にてお支払いください。
6. 1) 昼食：1 日（土）、2 日（日）ともに、学食では飲食できません。大学付近の飲食店を利用するか、弁当等をご持参ください。飲食店もそれほど多くありません。会場ではなるべくゴミを出さないよう、ご協力をお願い致します。
2) 東京外国語大学では、指定喫煙場所以外は禁煙となっています。

会場案内（6 月 1 日（土）・2 日（日）共通）

受付	研究講義棟 1 階ガレリア中央部
会員用休憩所	研究講義棟 1 階 109 教室
書店等の出展	研究講義棟 1 階ガレリア入口寄りの部分、102 教室
役員控室	研究講義棟 2 階 220 教室
外国人ゲスト控室	研究講義棟 2 階 222 教室
本部・スタッフ控室	研究講義棟 1 階 104 教室

6 月 1 日（土）

午前	自由論題	研究講義棟 1 階各教室
昼食時	研究講義棟 1 階 101 教室（昼食が食べられます）	
	理事・評議員会	研究講義棟 2 階 226 教室
午後	授賞式・シンポジウム	アグラ・グローバル、プロメテウスホール
懇親会	大学会館、大学生協食堂ミール	

6 月 2 日（日）

午前	部会およびワークショップ	研究講義棟 1 階各教室
昼食時	研究講義棟 1 階 101 教室（昼食が食べられます）	
	分科会	研究講義棟 2 階各教室
	総会	研究講義棟 2 階 226 教室
午後	部会およびワークショップ	研究講義棟 1 階各教室

東京外国語大学までの交通案内



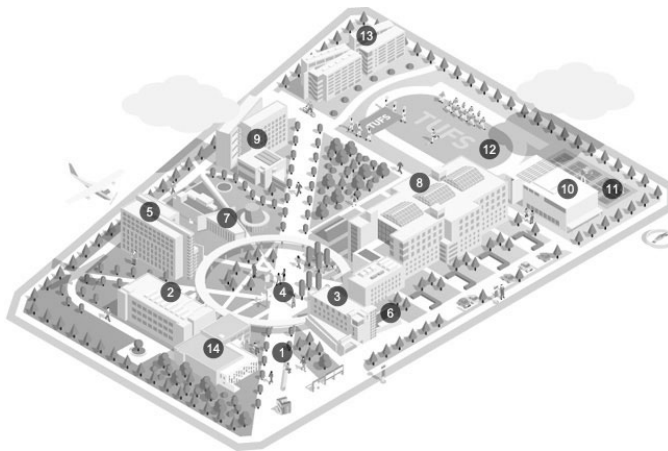
◆JR 中央線

「武蔵境」駅のりかえ
西武多摩川線「多磨」駅下車
徒歩5分
(JR 新宿駅から約40分)

◆京王電鉄

「飛田給」駅北口より多磨駅行き京王バスにて約10分
「東京外国語大学前」下車

キャンパス・マップ



1. アライバルコート 2. 附属図書館 3. 本部管理棟 4. 中央広場・円形回廊
5. アジア・アフリカ言語文化研究所 6. 保健管理センター
7. 大学会館←大学生協 懇親会会場
8. 研究講義棟←受付, 自由論題, 部会, ワークショップ会場
9. 留学生日本語教育センター 10. 屋内運動場・課外活動施設
11. テニスコート 12. 運動場 13. 国際交流会館
14. アゴラ・グローバル←プロメテウスホール シンポジウム

会場付近のホテル

東京外国語大学府中キャンパス付近のホテルを掲載します。必要がある場合は、各自で直接ご予約ください。

吉祥寺東急イン（最寄駅：吉祥寺）
180-0003 武蔵野市吉祥寺南町 1-6-3
0422-47-0109

吉祥寺第一ホテル（最寄駅：吉祥寺）
180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 2-4-14
0422-21-4411

リッチモンドホテル・東京武蔵野（最寄駅：三鷹）
180-0006 武蔵野市中町 2-4-1
0422-36-0022

ホテルメッツ武蔵境（最寄駅：武蔵境）
180-0023 武蔵野市境南町 2-1-8
0422-32-5111

調布アーバンホテル（最寄駅：飛田給）
182-0036 調布市飛田給 1-1-25
042-486-9321

ビジネス・イン・グランドール府中（最寄駅：多磨）
183-0004 府中市紅葉丘 2-13-3
042-336-6111

第 47 回年次大会 分科会（12：10～13：25）のご案内

（ ）は責任者および連絡先。会場はすべて研究講義棟 2 階の教室です。

1. アメリカ政治（平体由美（札幌学院大学）pxc02740@nifty.com）[207 教室]

テーマ：転換期のアメリカ政治

報告：1. 山岸敬和（南山大学）「“オバマケア”と転換期のアメリカ」

本発表では 2010 年 3 月にオバマ政権下で成立した「百年に一度の改革」と呼ばれる医療制度改革（Patient Protection and Affordable Care Act, 以下オバマ改革）が、アメリカ医療制度の発展の中でどのような意味を持つのかについて述べる。また現在でも続くオバマ改革をめぐる争いについて言及しながら、今後のアメリカ政治にオバマ改革が与える影響について議論する。本格的施行が始まる 2014 年を前にして、オバマ改革の意味を再考しようというのが本発表の狙いである。

報告 2：清原聖子（明治大学）「2012 年アメリカ大統領選におけるメディア・インターネット戦略」

2012 年大統領選挙戦では、有権者の選挙情報源として、ケーブルテレビに並んでインターネットが重要視される傾向が見られた一方で、テレビ広告量は 4 年前と比べて約 44% 増となった。はたして、これまでのテレビ中心選挙は後退し、インターネットが選挙戦のメディアとして主流となるのかどうか。本報告は、とりわけ急速に進化したスマートフォンの普及に注目し、関係者へのヒアリング調査を実施した上で、2012 年の大統領選挙戦においては、既存メディアやインターネット、さらに携帯電話の利用に関して 2008 年とどのような違いが見られたのかを明らかにする。

2. 経済・経済史（名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp）[209 教室]

テーマ：アメリカ貿易政策史——貿易障壁としての食品安全基準に焦点をあてて

報告：小山久美子（長崎大学）

新しい貿易障壁として近年注目されているものの中に、各国の食品安全基準の違いがある。現在、世界は貿易障壁を削減してさらなる自由化を進めていくため、食品安全基準の調和化を図る方向へ向かっている。つまり、グローバル・レベルでの食品安全の規制、基準が重要性を増している。このようなグローバル・レベルの動きは、各国の食品安全管理策に影響を及ぼすことになるが、一方で、逆に、主要国の国内動向がグローバル・レベルに影響を与えてきた。

このことに関して本報告は、アメリカの例を取り上げて歴史的観点から考察するものである。今や、グローバルな食品安全管理策として世界で重視されている HACCP (Hazard Analysis and Critical Control Point: 危害分析重要管理点) は、アメリカの 1980 年代初の連邦政府の食品安全管理の動向から大きく影響を受けた。今回の報告では、HACCP 導入にあたっての企業や連邦政府の見解のみならず、市民団体や労働団体の見解にも目配りしていきたい。

3. アメリカ女性史・ジェンダー研究（小野直子（富山大学）ono@hmt.u-toyama.ac.jp）[211 教室]

テーマ：9.11 における女性の表象

報告：森川智成（東京大学・院）

9.11 をめぐっては、テロ攻撃の発生直後から現在に至るまで、数多くの表象が産み出されてきた。2001 年 9 月 11 日の明らかな朝にニューヨークに穿たれた巨大な空洞は、映画、小説、ファッション、政治など、さまざまな領域から数々のイメージを呼び寄せたのであり、今もなお呼び寄せ続けている。そこでは、「自由」、「民主主義」を象徴するアメリカのイメージが要請され、消防隊員に代表される数多くの「英雄」たちが産み出されてきた。それでは、大挙して押し寄せるこれらのイメージの群れの中で、女性たちはどのように表象されてきたのだろうか。彼女たちもまた、「英雄」として祭り上げられたのだろうか。それとも、ここでもまたある種の「沈黙」を強いられたのだろうか。本発表では、9.11 における女性の表象を追いながら、女性たちがどのように表象され、どのようにその表象を生きたのかを明らかにすることで、9.11 における女性の表象の意味を読み解いていく。

4. アメリカ国際関係史研究（藤本博（南山大学）hiroshif@nanzan-u.ac.jp）[212 教室]

テーマ：書評会『『冷戦史』の再検討—ウォルター・ラフィーバー著、平田雅己・伊藤裕子監訳『アメリカ VS ロシア冷戦時代とその遺産』（芦書房、2012 年）をめぐって』

評者：青野利彦（一橋大学）

昨 2012 年に、米国を代表するアメリカ外交史家の一人であるウォルター・ラフィーバー（Walter LaFeber）による『冷戦史』の概説書の訳書が刊行された。原著（*America, Russia, and the Cold War, 1945-2006*, 10th ed.）は、何度も改訂を重ね、非常に評判の高い『冷戦史』の概説書である。そこで、今年度の分科会では、本訳書刊行の機会に、書評会を通じて、昨年度に引き続き、『冷戦史』研究の課題とその可能性について議論したい。

本分科会では、まず評者を務めていただく青野利彦氏からラフィーバーの冷戦史論ならびに日本で本訳書が刊行された意義についてコメントいただき、その後、監訳者である平田雅己（名古屋市立大学）と伊藤裕子（亜細亜大学）の両氏から青野氏のコメントに対するレスポンスとともにラフィーバーの冷戦史論の意義等への言及もしていただく予定である。本分科会では、日本の大学において『冷戦史』を教授することとの関連で本訳書刊行の意義についても意見交換できれば幸いである。

5. 日米関係（浅野一弘（札幌大学）k-asano@sapporo-u.ac.jp）[213 教室]

テーマ：「英米の植民地主義と太平洋海底ケーブル」

報告：土屋大洋（慶応義塾大学）

討論者：大野哲弥（ライティング・アンド・ブレイン）

1881 年、独立王国だったハワイのカラカウア王が来日し、明治天皇と会談した。王が天皇に提案したのは 3 点だったといわれている。第一に、日本移民の増加、第二に、自らの姫を皇室に嫁がせること、第三に、日本とハワイの間の海底ケーブルの敷設である。当時のハワイは、米国による併合の危機にさらされており、米国に対抗する力として日本からの援助を王は求めていた。王の三つの提案のうち、第二と第三の点については実現しなかった。第三の海底ケーブル敷設が実現するのは、王が亡くなり、米西戦争を契機にハワイが米国に併合された後の 1903 年になる。しかし、ハ

ワイを経由して最後に残された大洋である太平洋に海底ケーブルを最初に敷設しようとしたのは、当時の世界の海底ケーブルの6割以上を支配していた大英帝国であった。本報告ではなぜ大英帝国の「全赤線」と呼ばれるグローバルな海底ケーブルにハワイが接続できず、米国のものとなったのかを検討したい。

6. アメリカ先住民史研究 (佐藤円 (大妻女子大学) mdsato@otsuma.ac.jp) [214 教室]

テーマ：19世紀末アメリカ先住民教育政策史——その研究史と現代的課題について

報告：宮下敬 (立命館大学)

本報告では、内外の研究者がこれまで行ってきた19世紀末のアメリカ先住民教育政策に関する研究状況を紹介していく。具体的には、当該時代の研究の画期となった歴史研究者 (プリースト、ブルーカ、ホクシー、アダムズ) の研究業績を時系列に沿いながら紹介していく。

その上で、とりわけ1990年代以降の研究にみられる3つの問題点 (I. 研究の結論が「アメリカ化」や「人種差別主義」を指摘するに止まること、II. アメリカ史・世界史として通用するマクロな視点が見いだせないこと、III. 使用する資料や方法論がマンネリ化していること) を、内外の研究者が現在どのように乗り越えようとしているのかについて説明していきたい。

7. 初期アメリカ (橋川健竜 (東京大学) kenryu@ask.c.u-tokyo.ac.jp) [223 教室]

テーマ：“Columbia Rising: Thoughts on Public Sphere and the State in the Early American Public”

(「共和国初期における公共圏と国家：Columbia Rising 執筆を踏まえて」)

報告：John L. Brooke (Ohio State University) (ジョン・L・ブルック オハイオ州立大学)

コメント：肥後本芳男 (同志社大学)

橋川健竜 (東京大学)

ユルゲン・ハーバーマスが提起した「公共圏」概念が、冷戦後になって英語圏の政治哲学や社会科学の領域で注目を集めたことは周知のとおりである。だが同時に初期アメリカ研究、特に植民地時代後期から共和国初期にかけての歴史や文学研究の分野でもその有効性をめぐって多くの議論が交わされたことは、それほど知られていない。初期アメリカ研究の領域では、政治哲学などにおける議論とは異なり、公共圏概念と史料との整合性が、論点の一つとして浮上せざるを得ない。本分科会では、資料に基づいた実証的な議論の中に、公共圏概念の有効性に関する検討を含めた *Columbia Rising: Civil Life on the Upper Hudson from the Revolution to the Age of Jackson* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2010) の著者であるジョン・ブルック氏を迎えて、公共圏に着目して18・19世紀史を検討することの意義と課題を検討したい。会員諸氏の積極的参加を期待している。本分科会は英語で行う。

8. アジア系アメリカ研究 (野崎京子 (京都産業大学・名) nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp) [224 教室]

テーマ：アジア系アメリカ研究とオーラル・ヒストリー

報告：松本ユキ (大阪大学・院)

2012年8月から約一年にわたるカルフォルニア大学バークレー校のエスニック・スタディーズへの交換留学を通じて、オーラル・ヒストリーとアジア系アメリカ研究の関係について考えさせられた。

アジア系アメリカ研究の授業の受講者は、家族や友人、教員など身近な人物にインタビューをし、個々の経験を見聞することで、自分たちの歴史について理解を深めていく。このようなオーラル・ヒストリーの手法は、アジア系アメリカ研究において非常に重要な意味を持っている。

オーラル・ヒストリーは、大学以外の場でもアジア系アメリカ人の歴史を継承し、自らのコミュニティを形成するうえで大きな役割を担っている。本発表では2012年の8月から10月の間に西海岸で上演されたアジア系アメリカパフォーマンズにおいて、オーラル・ヒストリーの手法がどのように取り入れられていたのかを検討したい。

9. 文化・芸術史 (小林剛 (関西大学) go@kansai-u.ac.jp) [225 教室]

テーマ：ユートピアのレトリック——1939年ニューヨーク万博とアールデコ

報告：江崎聡子 (青山学院女子短期大学・講)

1939年にニューヨーク市で開催されたニューヨーク万博において、アールデコ様式は万博のコンセプトであった科学と技術によって実現される民主主義や消費文化といったものを表現し、アメリカを一つのユートピアとして語るための視覚言語として用いられた。このデザイン様式は、マシーンエイジの文化的背景、テクノロジーによるユートピア主義思想、そして生産様式および視覚的類似性両方における機械との親和性といった要因から、アメリカを大衆消費社会によって実現される民主主義のユートピアとして賛美するための視覚言語として機能することを期待されたのである。本発表では、二十世紀前半のアメリカにおける視覚文化の文脈において、アールデコ様式がテクノロジー崇拜主義やユートピア、そして未来のイメージといったものとのような関係を結んでいたのかを、主にニューヨーク万博を例にとりあげ考察する。ヨーロッパで誕生したこの装飾様式がどのようにアメリカに浸透し、そしてどのように当時の「未来」や「ユートピア」といった概念と結びつき、なぜこれらの概念を表象するレトリックになったのかを検証したい。

マイグレーション研究会 編

『エスニシティを問いなおす——理論と変容』

(関西学院大学出版会, 2012 年, 2,730 円)

本書は、2005 年の設立以来関西を中心に活動が続けるマイグレーション研究会のメンバーが、各自の研究を掘り下げながら、共通テーマのエスニシティに切り込んだ諸論文の集成である。1970 年代には目新しく感じられたエスニシティということばも、今や馴染んでしまった感がするが、その概念はいまだ理解しきれていない。そればかりか、21 世紀に入り一層、複雑化している。本書を手にし、「エスニシティを問いなおす」という執筆者たちの気迫に心がときめいた。

構成としては、第 1 部「エスニシティ概念の現代的位相」と、第 2 部「エスニシティ変容の諸相」からなる。第 1 部は、理論的なもので、エスニシティという概念を様々な角度から検証し、「その可能性を問いなおすための共同作業のはじまり」としての役割を果たす。第 1 章ではアメリカのエスニシティ理論、第 2 章ではヨーロッパの状況を踏まえたナショナリズムや国民国家、シティズンシップに鑑みたエスニシティ論、第 3 章ではトランスエスニシティ論、第 4 章では「アバター活動家」と「新ボアーズ学派」に関する議論が展開される。

第 2 部の事例研究は、「研究対象も手法も異なる研究者らが、個々の事例を各自のやり方でもって考察」したものである。その結果「あまりに多様であるために、全体としてみれば散漫な印象があることは否めない」との断り書きがあるが、どれも意欲的で、読み応えのある論文だ。テーマは概して日系人に関するもので、日系アメリカ人文学・映像（第 5 章）、日系アメリカ人相互扶助組織（第 6 章）、日系中南米人のリドレス運動（第 7 章）、日系カナダ人ガーデナー（第 9 章）だが、第 8 章はブラジル韓人についてである。歴史的考察が多いが、日系アメリカ人文学・映像の考察はリドレス前後と 9.11 後を比較分析し、最近の動向を追って興味深い。

さて、「エスニシティを問いなおす」議論であるが、第 1 部と第 2 部、それぞれが独立しているため、理論と事例を掛け合わせる作業は各著者の結論部分に委ねられる傾向がある。理論と事例を掛け合わせて、何かハイブリッドなものを求める作業は確かに困難なもので、ないものねだりになるが、例えば第 3 章のトランスナショナリズム論を第 6 章の日系アメリカ人の相互扶助組織の変容に当てはめると、どのような理解が可能だろうか。またグローバル化の進んだ今、各国の日系人の中に「アバター活動家」を見出す可能性はあるだろうか。インターネットの普及は 21 世紀の「日系」をどう変化させていくのか。ブラジルの韓人と日系人の共通項はあるのかなどの質問に、いかに答えるかの課題が残る。

これらの課題は、研究会の更なる議論と成果が出版される日を待つべきものかもしれない。研究会の中だけにとどまらず、世に問いかける本書が、より多くの人の目に触れることを願いながら、本書を再読している。

山本恵里子（名古屋外国語大学（講））

佐藤 円, 大野あずさ 訳

『アメリカ先住民女性の現代史——“ストロング・メディスン” 家族と部族を語る』（エイミー・ヒル・ハース著）

(彩流社, 2012 年, 2,940 円)

本書は、北米のジャーナリスト兼作家がひとりの先住民女性へのインタビューを回想録として纏めたオーラルヒストリーを、我が国の先住民研究者二名が詳細な訳注を付し翻訳したものである。

先住民集団（部族）ナンティコーク・レナ＝ラナビ（通称ラナビ、別名デラウェア）に属する女性長老マリオン・ストロング・メディスンの回顧のかたちをとる本書では、彼女の視点から見た先住民集団ラナビと自身の家系の歴史、現在に至るまでの自分の歩みが、十一部二十七章を通じ独自形式で語られる。ただし各部冒頭には著者ハースによる流麗な小文が加えられ、語りの内容をより理解し易くするための解説と共に、ストロング・メディスンの語りへと自然に誘う工夫がなされている。

著者ハースはこれ以外にも、執筆の意図と経緯、先住民集団ラナビの歴史と特色、そしてラナビの神話と言語についての簡単なガイドを付記している。読者は本文に加えこれらの箇所、とりわけ「はじめに」を精読することで、これまで知られることの少なかった北米先住民の実情についての有意な知見を得ることができよう。

一例を挙げれば、西部保留地に閉じ込められた先住民という多くの人々がもつ印象は、現実の一面を示すに過ぎないということである。先住民は実際には都市部を含む合衆国全域に居住しており、本書の先住民集団ラナビも東部大西洋岸のニュージャージー州に居住している。また、多くの先住民は歴史的経緯の中で「白人」や「黒人」との混淆を繰り返し、その結果主流社会から外見的にも文化実践上も「インディアン」とは見なされず、エスニック集団としての存立およびアイデンティティ危機に陥る事例が現在も多く発生していることである。とりわけラナビは、「黒人」との混血が比較的進展した集団といわれ、「インディアン」であることが差別と迫害をもたらすが故に素性を隠匿し自分たちを「黒人」と称する必要があった過去から、「インディアン」、あるいはラナビとして生きることが大きな意味をもつようになっていくまでの経緯をストロング・メディスンが物語る箇所は、先住民が直面する複雑な事情や、先住民で在ることの意味を考えさせる、非常に興味深いくだりである。

話し言葉で訳出された文体は、いささか生硬さを感じるくらいはあるが、スラングも含む生き生きとした語りを読者に伝えようとした原著の狙いを出来る限り日本語に移し替えたいという思いが感じられる。また翻訳者加筆による充実した脚註はしばしば本文の量を凌駕する詳細なもので、十分すぎる程に情報を補完している。ときに本文の読解の流れを中断しかねないことさえ恐れなければ、アメリカ史や北米先住民に関わる知見の薄い読者は無論のこと、本書を手掛かりに先住民研究により広い文脈で更なる一步を踏み出そうとする学徒にも、有益な情報を提供するだろう。北米先住民に関心をもち一般のひとびとにより親しみ易いかたちで知見を敷衍する意味でも、日本の学術的な先住民研究に一層の充実を加味するものとしても、本書のこの度の翻訳を喜ぶたい。

岩崎佳孝（大阪大学・院/立教大学客員研究員）

土屋由香・吉見俊哉 編

『占領する眼・占領する声——CIE/USIS 映画と
VOA ラジオ』

(東京大学出版会, 2012 年, 5,670 円)

日韓米の研究者を執筆陣に揃えた国際的な共同研究の成果である本書は、GHQ/SCAP の一部局である民間情報教育局 (CIE) 及び合衆国広報・文化交流局 (USIS) による教育・啓蒙的映画 (CIE/USIS 映画) と海外向けラジオ放送ヴォイス・オブ・アメリカ (VOA) という二つの視聴覚メディアを通じた米国政府による対外文化戦略を主題とする研究である。この戦略の狙いは、一般市民を“再教育”しつつ対象国を親民主主義国家に再構築することにあったが、本書は、戦後直後から冷戦初期の日本及び東アジアにおける二つの視聴覚メディアの普及を旨とする政策展開と民衆レベルでの受容の双方に関して実証的な手法の下に詳細に分析している。

本書は、冒頭の総論と二部から構成されている (巻末に CIE/USIS 映画制作に関わった監督及び出演者へのインタビュー 4 本を掲載)。総論で CIE/USIS 映画と VOA 誕生の経緯が説明された後、第 1 部「政策としてのメディア冷戦」では、CIE/USIS 映画と VOA を通じたアメリカ政府の広報宣伝/メディア政策の意図と展開が主なテーマとされる。冷戦下のアジア太平洋地域を対象とする文化外交のプロパガンダの心理戦としての性格、USIS 映画を通じた原子力の平和利用というヘゲモニックな知の構築、高学歴エリート層の視聴者を対象とする VOA フォーラム、アジア地域における VOA 中継所設置の地政学的意味合い、韓国で上映された USIS 映画と「冷戦民族主義」構築との関連、加州に招かれた日本人農業従事者の“近代的”アメリカ体験を描いた USIS 映画の制作過程を各々分析した 6 編の論文が収められ、米国政府の広報文化戦略の実態が浮き彫りにされる。第 2 部「メディア冷戦を受容する」では、CIE/USIS 映画と VOA の制作/上映/放送に関わった人々の動向や視聴者側の状況の分析に焦点が当てられる。アメリカの価値を体現するスポーツ (特に野球) を題材とする CIE 映画と VOA の広報外交への利用、衛生的で民主的な家族像の提示とその中の主婦の役割を描いた CIE/USIS 映画の内容、敗者である日本側関係者による日本製 CIE 映画の多様性/多義性、新潟を事例とする CIE 映画のローカルな場面での受容、日本各地で開かれた原子力平和利用博覧会と「豊かな日本」を願望した受容、を分析した論考が収められ、最後に CIE 映画の保存と修復のプロセスの紹介で結びとなる。各論考とも政治的・教育的・娯乐的・プロパガンダの要素全てを備えた視聴覚メディア媒体の起伏に富んだ受容の重層性を浮かび上がらせる。

本書は、冷戦下、視聴覚メディアを通じた広報宣伝政策の実施側の意図と受容側の「解釈の揺らぎ」の交錯という複雑な問題の解明に学際的/多角的に取り組み、全体として高水準の論考を描いている。切り口が多様なだけに米国政府による広報宣伝政策の成否を総括的に論じて欲しいと感じたが、冷戦が「封じ込め」という言葉に象徴される防衛的な軍事外交戦略だけでなく、民衆の心を勝ち取るためのアグレッシブな文化戦略を含んでいることに着目する文化冷戦史研究の成果として、この分野に大きな貢献を成すものであるといえよう。

佐々木豊 (京都外国語大学)

草野大希 著

『アメリカの介入政策と米州秩序——複雑シ
ステムとしての国際政治』

(東信堂, 2011 年, 5,670 円)

本書は、国際法社会学の理論である「複雑システム」の考え方を「メタ理論」として国際政治研究に取り入れ、後者の分野において相互に対立すると考えられている三つの主要な理論的立場 (ネオリアリズム, ネオリベラリズム, コンストラクティビズム) の相互の関連性を「複雑システム」の視点から理論的に解明し、「総合化」することをめざしている。本書は、また具体的事例として 20 世紀前半のアメリカ合衆国によるラテンアメリカへの介入政策を取りあげて詳細に検討するなど、アメリカ外交のすぐれて実証的な研究ともなっている。

本書は、冒頭で「複雑システム」について説明したあと、第 I 部の諸章において、「複雑システム」を構成する人間行動に関わる基本的システムとされる「利害システム」、「役割システム」、「シンボル・システム」の三つをネオリアリズム, ネオリベラリズム, コンストラクティビズムのそれぞれが想定する国際政治システムと関連付けて考察し、この 3 理論が必ずしも「相互対立的ではなく相互補完的な関係」にあるとしてその「総合化」を試みる。

次の第 II 部は、上記の理論的考察に基づく実証部分であり、第 5 章で「複雑システム」を「操作化」した「国家利益 (利害)」、「国家システムの利益 (役割)」、「理念 (シンボル)」の三つの変数からなるモデルを提示し、以下の諸章でそのモデルを用いながら 19 世紀末からのアメリカによるラテンアメリカへの介入政策の本格化と 1920 年代から 30 年代にかけての不介入政策への転換を分析し、その理由の説明を試みる。著者によれば、この一連の過程は、ネオリアリズムが想定する「単純な」国家利益の論理だけでは説明できないとして、ネオリベラリズムの注目する「国際システムの利益」やコンストラクティビズムが照射する「理念 (シンボル・システム)」を加えた三者の複雑な絡み合いの中で展開された点が強調され、3 理論の上位にあってそれらを包摂する「複雑システム」の有効性が確認されたと結論付ける。

全体として丁寧な説明の積み重ねが印象的であるが、1)「複雑システム」の視点からの上記 3 理論の相互補完性を強調するあまり、それぞれの理論的立場が中心的に主張する点ではなく、例外的に含まれている「含意」とでもいうべき点を強調し過ぎるきらいがあること、2) 上記の説明を待つまでもなく「理念の国家」アメリカによる領土拡張や対外介入の持つ複雑な性格はつとに指摘されてきた点であること、3)「理念」という言葉は、アメリカ研究の文脈では一定の意味合いを込めて用いられることが多く、「操作化」された中立的な分析枠組みとして用いることが適切か、といった点は気になった。

こうした点はあるものの、本書は全体としてしっかりとした分析に基づき、議論も概ね説得的に展開されている。国際政治研究の書としての理論的性格が色濃くあるものの、アメリカ外交研究としても 20 世紀前半のラテンアメリカへの介入政策の成立と展開について、「複雑システム」という独自の視点から系統的な説明を試みた点は興味深く、一読に値するものといえよう。

上村直樹 (南山大学)

樋口映美 編著

『流動する〈黒人〉コミュニティ——アメリカ史を問う』

(彩流社, 2012 年, 2,940 円)

本書は、日米の第一線で活躍する研究者が「アフリカ系アメリカ人を主体としたコミュニティの形成・変遷のプロセス」を検証した論文7本と、論文に関連した人物紹介のコラム4本から構成される。19世紀から現代に至る時代とガーナや日本に及ぶ地域も射程に入れた本書を、編者は「実験書」と呼ぶ。その挑戦的な姿勢は書名からも窺えるが、本書では、コミュニティは「人びとが共感や対立を経験して人と人とのつながりを紡いでいった先のできるもの」と定義される。物理的・政治的な枠組みや既成の価値観などに必ずしも縛られることなく、有形無形に形成されるコミュニティは、常に再編を繰り返す。その流動的なあり様を歴史から掘り起し、検証する作業こそ本書の目的であり、そうした作業を見落としてきた従来の研究に対して、本書は鋭い問いを投げかけている。〈黒人〉という表記には、人種差別の歴史や、呼称の使用に潜在する差別の再生産という問題を沈思内省する、執筆者たちの歴史家としての姿勢が示される。

第1章のヘザー・A・ウィリアムズ論文は、奴隷が強いられる別離や、離散家族を探し求める(元)奴隷の動きに注目することで、奴隷コミュニティの機能や絆の強さを浮き彫りにする。第2章の佐々木孝弘論文は、南北戦争後のノースカロライナ州ダーラムに農村出身の黒人が築いた都市型コミュニティが、ジェンダー規範にそった相互扶助の機能を有していたことを明らかにしている。第3章の樋口映美論文は、黒人実業家ジェシー・ビンガを中心に、「大移住」時代のシカゴにおいて黒人たちが幾重にも人的ネットワークを構築し、生活基盤を固めていった様子を描く。第4章の藤永康政論文は、人種分離された長距離列車の給仕という特殊な労働に従事した黒人ブルマン・ポーターを取り上げ、彼らの「公共圏」を20世紀初頭の人種・ジェンダー・階級の文脈の中で再現し、「公民権組合主義」意識の滋養過程を提示する。

本書の後半では、ローカルな動きと連関しながらグローバルに拡大するコミュニティ(の試み)が語られる。第5章のケヴィン・ゲインズ論文は、独立前後のガーナにアメリカから亡命した黒人を、冷戦下の複雑な国際政治やガーナとアメリカ国内の黒人政治の狭間で、社会主義的・ジェンダー平等主義的な汎アフリカ主義に基づいた連携を模索した先駆者として描く。第6章の土屋和代論文は、20世紀半ばに被抑圧者の解放を希求する黒人神学と在日市民運動が、空間的な隔たりを越えて「共鳴」しあい、展開した経緯に光を当てる。第7章の村田勝幸は、20世紀末のニューヨークにおいて、ハイチ系住民が警察の度重なる残虐行為を通じて政治的に覚醒し、「アフリカン・ディアスポラ」の一員としての自覚を高めていった意識の変化を描き出している。

いずれの論考も、国勢調査原票、裁判記録、聞き取り調査記録等の史料を渉猟し、動態的な人々のつながりを歴史的な文脈の中で分析した完成度の高い学術論文である。同時に、人種主義社会を〈黒人〉として生きた人びとの「絆の物語」としても読み応えがある。その意味においても、本書は斬新な試みの書＝「実験書」と言えよう。

落合明子(同志社大学)

貴堂嘉之 著

『アメリカ合衆国と中国人移民——歴史のなかの「移民国家」アメリカ』

(名古屋大学出版会, 2012 年, 5,985 円)

「移民国家」としてのアメリカ合衆国の自画像は、18世紀末にクレヴクールが描いた『アメリカ農夫の手紙』以来、形を変えながらも国内外の人々に共有されてきた。本書は、この神話化された歴史像をアジア系移民の視座から書き換えることを意図した研究書である。

本書は3つの刺激的な問題提起を行っている。一つ目は、アメリカ合衆国は建国当初の「奴隷国家」から、「移民国家」に移行したという指摘である。移民の自由労働と、黒人奴隷、年季奉公人など不自由労働が混在していた南北戦争と再建期に、解放された奴隷に代替するものとして導入されたのがアジアからの契約労働者であった。そして、奴隷と自由移民の間にいたのが中国人移民と「苦力」だったが、この二つは労働実態に基づく区分ではなかった。しかし、グローバルな奴隷解放運動が進むなかで、英米主導の下、自由労働と不自由労働の基準が形成され、「自由な移民」という概念や「自由労働者の帝国」というアメリカの自己イメージが創り出された。

問題提起の二つ目は、「移民国家アメリカ」は、「中国人問題」への対応から生まれたという点である。アメリカ合衆国が初めて、特定の国籍を有する労働者の入国を禁止したのが、1882年の排華移民法だった。この法律の制定によって、近代的な監視技術を持つ出入国管理システムを備えた移民国家が誕生した。外国人をドキュメントによって管理・掌握する方法は、中国人をはじめとするアジア系を被疑者扱いし、人種化・隔離したエンジェル島の移民行政のなかで形作られた。その後、この方法は外国人監視の制度化につながった。

問題提起の三つ目は、連邦政治のなかで議論された「中国人問題」は、人種と深くかわり、「アメリカ人」の境界の形成において象徴的媒介の役割を果たしたという主張である。アメリカ合衆国では、1790年の帰化法によって「白人性」が市民権の要件となり、すべての移民集団が帰化手続きを通して、人種化されるプロセスを経験することになった。南北戦争から再建期にかけて国民の境界の再定義がなされ、その転機となったのが黒人の投票権を定めた1870年の憲法修正15条の制定であった。同時に、投票の質を維持するため、「市民」の選定と排除が行われ、最初のスケープゴードとなったのが中国人移民だった。中国人移民は、それまで「自由」移民とされていたが、一転して「不自由」「自治能力のない」者とみなされ、非白人の烙印を押されることになり、これが1882年の排華移民法の制定を導くこととなった。

中国人の移動をグローバル・ヒストリーに位置づけ、中国人をめぐる問題を清朝とアメリカ合衆国の各々の国内政治と外交のリンケージ・ポリティックスのなかで捉えるというスケールの大きな視点とともに、風刺画など図像資料を用いて排除の力学と国民の想像力を分析するという本書が用いた方法論も示唆に富むものである。本書は、日本におけるアメリカの国民史研究と人種研究の到達点を示しており、今後アメリカ史研究の必携の書となるだろう。

山本明代(名古屋市立大学)

青木怜子 著
『私の中のアメリカ』

(論創社 2012 年, 2,310 円)

本書の著者と本稿筆者とは、ともに「国民学校」に入学したため、これまで、ほぼ同時代を経験してきたと考えてよく、また、同じアメリカを対象に学んできた。従って、著者の体験に基づく本書の記述は、筆者の共感出来ることが多かった。

本書は全八章からなり、20 世紀後半のアメリカが、主な舞台となっている。とはいえ、第 1 章では幼時をアメリカで過ごした著者が、1939 年に帰国して以来、日本のミッション・スクールで受けた初等・中等教育および大学教育の経験が主に描かれている。著者は初等教育では、いわば「帰国子女」のはしりともいえる。

著者の大学卒業後のアメリカ経験は、第 2 章から始まる。まず大学院生活の記述があり、大学院の所在地である首都ワシントン D.C. に関する解説が続く。

著者にとっての「アメリカ」の「アメリカらしさ」は、第 3 章の主要テーマである自動車運転免許取得に関する経験から始まる。ワシントン D.C. には運転免許取得のための「出前」教習員がおり、著者はこの「出前」によって運転免許証を取得した経験を語る。

次の第 4 章では、ケネディー族を縦糸として、南北の対立や人種問題が紡がれる。著者はベトナム戦争の混沌の時代であったにも拘らず、この時代を生きた人々は、ケネディ兄弟に希望と覇気を見ていたと述べる。

第 5 章では、アメリカで大学院を終了した後の著者が、日本での教員としての生活や学生との交流などが、エピソードを交えて語られる。続く第 6 章と第 7 章では、著者のアメリカ大陸一周の旅とその思い出が語られる。第 6 章では、ロスから始まり、南部諸州の旅が綴られ、次いで第 7 章では、ワシントンからアメリカの心臓部である西部を経てサンフランシスコに至る旅が描かれる。

最後の第 8 章では、著者が 1992 年と 1993 年の二回にわたって、ニューヨークで国連代表代理を務めた経験が語られる。この仕事を通じて、なかなか実際に経験した人でないと分からない国連の委員会での議論や各種委員会の役割などが語られる。観光客として訪ねたことしかない筆者には、実に読み応えがあった。以上が本書の概要である。

さて、筆者には著者の持つアメリカ観を共有することは出来たものの、日本人として、アメリカに対する批判的視点が少ないことに、やや物足りなさを感じた。第二次大戦中に日系人が強制収容されたが、後にアメリカ政府が補償したことについては触れられているものの、彼等日系人の「復権運動」が如何に大変なものであったかについては、殆んど触れられていない。全般的に言えば、プロ・アメリカ的なトーンで記述されているが、著者は決してアメリカの全てを認めている訳ではなからう。従って、もう少し批判的な視点からの記述が加わっておれば、本書の意義はより増すことになったと思われる。

なお、ワープロの変換ミスはさておくとしても、固有名詞の誤記や事実の思い違いなどが散見されるので、増刷の折には訂正されるように望みたい。

岩野一郎 (南山大学名誉教授)

伊藤詔子 監修・新田玲子 編
『カウンターナラティブから語るアメリカ文学』

(音羽書房・鶴見書店, 2012 年, 3,570 円)

本書を手にする読者はまず「カウンターナラティブから語るアメリカ文学」というタイトルに手強さを感じるだろう。本書はボー研究、エコクリティシズム研究で活躍の伊藤詔子氏の退官を記念して企画されたものだが、伊藤氏は「まえがき——ソロー、カーソン、広島」で正面から「ナラティブ」、「カウンター」の解説を行い、編者による「あとがき」を合わせ読めば、本書の主旨をつかむとともに、自らが漠然と持つアメリカ文学の「カウンター性」を吟味させてくれる本だと予め期待することが出来る。

本書は「I カウンターナラティブとアメリカン・ルネサンス」、「II エスニシティとジェンダーにみるカウンターナラティブ」、「III カウンターナラティブの新たな展開」の三つに分かれている。I で扱われるのはホーソン、メルヴィル、チャイルド、ポー、トウェイン、ミュアとソローで、スコット・H・スロヴィックのエコクリティシズム論が加わる。II が取り上げるのはフィッツジェラルド、フォークナー、スタインベック、モリスン、日系のディヴィッド・マスモト、チカーノ作家ルドルフォ・アナヤ、先住民族作家ルイーズ・アードリックである。III には日系アメリカ人収容所をめぐるジュリー・オオツカの小説、ジーンズ文化、詩人スナイダーとアレクシーの世界、戦争映画、ポストモダン・ホロコースト文学についての論文が属する。計二〇篇あり、各論文いずれも力作である。評者はアナヤやアードリックのカウンターナラティブ論から数々のことを学び、語りのありように興奮を覚えた。他の論文についての言及はスペースの上で無理であり、今後アメリカの文学、文化研究に寄与するところ大だろうと述べておくしかない。

本書全体の特徴としては環境文学、エコクリティシズムとの強い関係がある。土地を収奪され、自らの居住地が環境汚染にさらされてきた人々のカウンターナラティブがエコロジー文学になるのは当然であろう。「エコロジー的世界観の出発点」(伊藤)と見なされるソローは複数の論文で言及されている。もうひとつの興味深い点は、カウンターナラティブによって当然その存在が浮かび上がるナショナルナラティブ、マスターナラティブとカウンターナラティブの関係である。ただ本書に接しながら若干の混乱を覚えるのは、この関係そのものを論じることが避けられているからであろう。「まえがき」において明言されるナショナルナラティブは「マニフェスト・デスティニー」であるが、「国民全体が共有しているように見える」ものというナショナルナラティブの定義は曖昧さを含んでいる。「対抗文化」の若者たちの象徴だったジーンズはカウンターナラティブから「共同体で信奉される」マスターナラティブに移行し、モリスンの『ビラヴィッド』はカウンターナラティブがナショナルナラティブになったと論じられる。「カウンターナラティブの淵源」(伊藤)であるアメリカン・ルネサンスの作家はナショナルナラティブと関わっている。本書はアメリカの持つ多様なナラティブを示し、またナラティブ同士の複雑な関係を考えさせる。

海老根静江 (お茶の水女子大学名誉教授)

水谷裕佳 著

『先住民パスクア・ヤキの米国編入——越境と認定』

(北海道大学出版会, 2012 年, 5,250 円)

本書は、2009 年 3 月に上智大学外国語学研究科地域研究専攻に提出された博士論文を基に執筆された。米墨国境線を跨いで生活する先住民ヤキのうち、米国側のアリゾナ州を中心に居住する人々を「パスクア・ヤキ」と呼ぶ。かれらが米国先住民社会という枠組みに法的・社会的・文化的に編入されていく過程を、米国先住民研究の観点から捉えようとするのが、本書のねらいである。著者の 2006 年～09 年のカリフォルニア大学バークレー校エスニック・スタディーズ研究科での在在外研究やパスクア・ヤキの社会調査の成果も、ここに反映されている。

同書の焦点はパスクア・ヤキの米国先住民認定問題にあり、そこには、かれらの認定問題への関心を高め、かれらの間に議論を喚起し、自分たちの歴史の真実を知らしめたいとする、外部者である著者の調査研究対象者に対する社会還元的な意図が込められている。そもそも、限定的な主権を持つ「トライブ」にとって、主権を持つ米国政府から集団としての先住民認定を受けることは、「国家対国家」として政府と対話するために必要となる。一方、認定を受けた「トライブ」政府は、自ら提供するサービスを誰が享受できるのかを、個々人を「トライブ」政府の構成員として認定することによって決められる。

本書は、序章と終章を除き、5 章構成である。おそらく、パスクア・ヤキに重点を置いた日本語の著書はほかにないであろうという配慮からか、第 1 章は、本書を読む際に必要な基礎知識の説明から始まり、前述の認定制度、ヤキという人々、パスクア・ヤキ・トライブ集団、および米国での研究動向に関する記述へと続く。第 2 章では、パスクア・ヤキは、そもそもポリフィリオ・ディアス政権の迫害を逃れてメキシコから米国側に集団移住したヤキの子孫であり、移住後もメキシコ側のヤキを物質面で特に支援していたという事実が述べられ、あくまでもこの移住の目的は、「民族全体を守るための拠点を米国で形成するためであった」ことが強調される。

第 3 章では米国に移住したヤキがアリゾナ州南部を主な定住地とし、観光産業への参加を通じてヤキ以外の米国人たちとつながりを形成することによって、ヤキがアリゾナを含む米国南西部に歴史的に存在し、同地域の社会の一端を担う存在として市民に認識されていく過程が説明される。続く第 4 章では、ヤキが観光業以外で、発展途上の南西部における賃金労働者として地域振興に貢献し、さらには 1960 年代半ばからの米国での先住民権利獲得運動の影響を受けつつ、米国のインディアン・トライブとしての法的地位を獲得していく過程が述べられる。最終的に、1978 年にパスクア・ヤキのトライブ認定は実現するが、最後の第 5 章では、トライブ認定から 30 年近くたった現在のかれらの実態とその問題点を、著者の現地調査結果と資料を通じて論じられる。

国境を跨いで生活する先住民の歴史と現在は、近年の中南米系の移民や二重国籍者たちが本国送金や商取引などを通じてトランスナショナルに本国と日常的につながっている状況を彷彿とさせる。先住民研究の著作でありながら、広くはひとの生活圏と国境線との関係を考えるきっかけにもなる。 中川正紀 (フェリス学院大学)

吉野 孝・前嶋和弘 編著

『オバマ政権と過渡期のアメリカ社会——選挙、政党、制度、メディア、対外援助』

(東信堂, 2012 年, 2,520 円)

本書はオバマ政権の初期、およそ 2009 年 1 月から 11 年秋までの時期を対象にして、アメリカ政治を論じている。扱われているトピックは、一部は副題でも示されているように、ティーパーティーと 2010 年中間選挙、議会下院共和党指導部の戦略や活動、アイオワ州におけるグラスルーツ・ポリティックス、メディアとの変化とそれが及ぼした選挙戦術の変化、2010 年の下院議席再配分、大統領選挙人制度の現状と問題点、オバマ政権の対外援助政策、2010 年中間選挙後の政治動向である。本書は早稲田大学日米研究機構での 7 人の共同研究の成果であり、論文集である。

アメリカ政治のなかでもっとも最近の情勢を扱っているだけに、いくつかの分析・指摘あるいは情報は有益である。とくにティーパーティーの支持者の社会的属性を解明し、またなぜティーパーティーを支持するかを説明した第 1 章、アイオワ州におけるグラスルーツ・ポリティックスについての第 3 章、ソーシャルメディアの役割を踏まえた選挙戦術の分析に関する第 4 章などは興味深い。また、下院議員の各州への定数再配分について、マイノリティとの関係を含めて短い論文ながら体系的に説明してくれた第 5 章も非常に示唆に富む。

他方で、やや思案させられるのが、表題の「過渡期のアメリカ社会」という言葉であろう。アメリカ社会も他の社会と同様、つねに変化している。この表題は、アメリカ社会がどのような状態から、それとは違うどのような状態に変化していることを指して、「過渡期」と付けられたのであろうか。この点についての説明はなく、何から何かへの変化が理解しがたいために、本書のメインテーマが何であるかも理解しずらくなったように感じられる。ここがやや惜しまれる点である。(ちなみに、やはり表題にある「オバマ政権」についても、それほど詳しい分析はない)。

また、オバマ外交や安全保障政策全般、あるいは中東や中国に対する外交政策を扱う章がないなかで、なぜ外交では対援助政策だけが取り上げられるのか、とくに援助政策が顕著な成功を収めたということもないだけに、やや奇異に感じられた。それは大統領選挙人制度についても、ある程度同様である。とくに「変化」という要素があまり顕著でないように感じられたために、余計にそのような読後感が残った。

たとえば、本書がティーパーティーに台頭に象徴されるアメリカ政治の保守化、二極分化、あるいは保守の急進化などを軸に、それが外交・安全保障政策を含むさまざまな領域・分野に与えた変化や衝撃について考察するように構成であれば、よりすっきりと筋がとったものになっていたような気はする。ただし、これは一読者の無責任な「ないものねだり」にすぎないかもしれない。

全体として、アメリカの政治の全体像についてある程度知りながら、いくつかのトピックについてやや立ち入って最新の動向を詳しく知りたい方に便利な書であろう。

久保文明 (東京大学)

有賀貞先生のご逝去

1992年より94年まで、本学会の会長を務められた有賀貞一橋大学名誉教授が、病氣治療中の3月13日逝去された。有賀先生は、アメリカの政治外交史や国際関係史を中心として、きわめて創造的な研究を進める傍ら、国内外に培われた広い人脈を活かし、学会活動にも積極的に取り組み、草創期以来一貫して本学会の中心的メンバーであられた。特筆すべきは、先生がご自分の勤務先大学という壁を越えて、広くアメリカ研究に従事する若手や大学院生の育成に多大のエネルギーを注がれてきたことであろう。長きにわたる先生の学恩に深く感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。
(会長 古矢 旬)

第48回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第48回年次大会は、2014年6月7日(土)、8日(日)に、沖縄で開催されます。会場等の詳細は、次号以降の会報にてお知らせいたします。企画提案やご報告希望を下記の通り募集しますので、会員のみならず積極的な応募をお待ちしております。部会につきましても、一般会員からのご提案に基づいて企画されますので、よろしく願いたします。なお、すべての応募は事務局<office@jaas.gr.jp>宛に、1～3のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」(締切日: 11月20日)

報告テーマ、1,500字程度の要旨、およびキーワード5つを記載。自由論題での報告は会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象としますので、ご注意ください。また、2014年の5月15日までにペーパー(和文の場合8,000字～12,000字、英文の場合は5,000～7,500 words程度)を提出していただき、それを学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後2週間のみ、ペーパーを読むことができるようになります。なお、大会当日の報告時間は20分とし、報告は2年連続を上限とします。

2. 「部会の企画提案」(締切日: 8月31日)

部会のテーマおよび800字程度の要旨。報告者案があれば合わせてお願いします。部会の企画に関しては、以下のような申しあわせ事項がございますので、ご注意ください。第46・47回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第47回大会の部会では報告できません。司会者、討論者として応募されることも、原則避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則学会員としてください。会員以外の部会登壇者に対して、学会から謝金・交通費などは支払われませんが、必ずしもそれを条件とはいたしません。

3. 「分科会開催申し込み」(締切日: 8月31日)

新規の場合は、分科会趣旨(400字以内)と、連絡責任者および賛同者5名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

新入会員

阿部公彦	東京大学
島 晃一	早稲田大学
山口菜穂子	明治大学
西田竜也	広島市立大学
貞廣真紀	明治学院大学
HIGGINS Shawn	University of Connecticut

政 思
女 文 衆
外 米 史
史 米 文
民

編 集 後 記

今、キャンパスは実に美しい。早い桜の開花は、モクレンの白さと、まだ残る椿の赤さとともに、キャンパスを一気に春色に染め上げている。早咲きの花の祝福は、入学する若人への待ち遠しいような思いを痛感させる。こうした期待は、教養教育での英語による授業を一気に増やそう

とする最近の動きにも表れている。だが、国際社会で貢献する人材を育てたいという思いは同じであるものの、数値で表されるような英語力が伸びても、より豊かな思考力を育てることとは一致しない。アメリカを学ぶ者であるからこそ、英語以外の世界の様々な言語文化をも伝えたいと切に思う昨今である。(文責田中)

2013年4月15日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科附属
アメリカ太平洋地域研究センター 気付
Tel & Fax (03) 5454-6163
http://www.jaas.gr.jp

発行人 古 矢 旬

編集人 庄 司 啓 一

印刷所 啓文堂松本印刷

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12